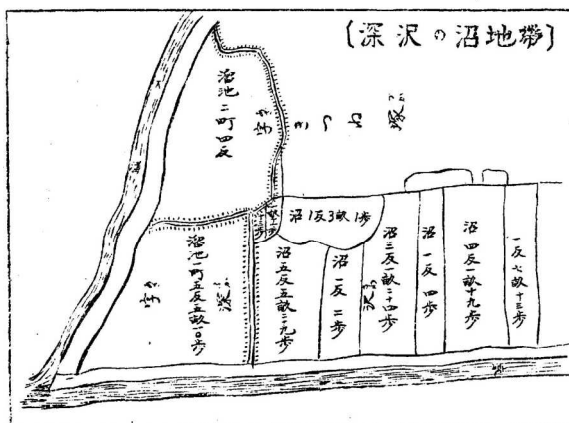


六、深沢の干拓

(一) 深沢の砂山の由来

今の溝川
（郷土誌より）
溝川に対して中溝
川という川もある。


水の源を辻町吉祥寺山の麓に湧き出し、篠原村大字小堤を経て祇王村上屋に入り、屈曲が激しく、北の境に於いて東祇王井川に近寄り、朝鮮人街道にそって流れ、新家棟川に注いでいるのが現在の大溝川である。それ程川幅は大きくないが、川底



が高く、上屋約千反（約九九二〇アール）と言われている中の大部分九五〇反程を、灌漑用水として利用していたのであるから、耕作者にとっては命の大恩川とも言えるのである。

家棟川は天井川と言われているだけに、川底が非常に高いが大溝川も耕作田にくらべて高く、しかも水の源が花崗岩の風化した砂から出来ているために、一度雨が降れば土砂の運搬が非常にはげしく川底を高くするばかりである。川底を高くすることは、大水が出た時に大へん危険であるので富波・上屋・上永原は家棟川へ、上屋は又大溝川へ年々日をきめて総出で、或る一定量の土砂を外に運び出していたのである。これを「坪持ち」と言う。

家棟川の土砂は坪持ちをしても、川の両翼の堤防に積んでいったのであるが、大溝川の土砂は、一定の場所に積み上げられたのである。これが現在ものこっている深沢の砂山なのである。この砂山を見た時、私達の祖先が水のために、どれだけ苦労されたかがよくわかる。「今もやっておられるかしら。」とお母さんに聞いて見ると、「いいえ今はもう坪持ちなどと言う大へんな仕事はしていないのです。そんなことをしなくてもよいように川が整理されたのです。」と言われた。



(坪持ちのなごり深沢の砂山)



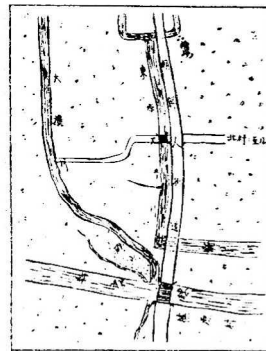
(坪持ちのなごり深沢の砂山)

砂山は以前はもっと高かったが北村等が正月の門松や表にまくために砂を運ばれたからひくゝなった。

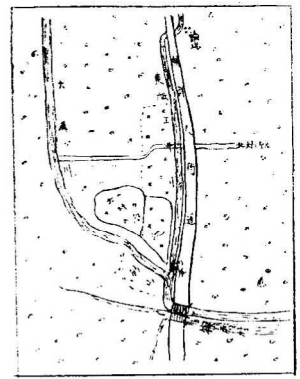
（二）排水の苦勞

「どうしてそんな大変な仕事を毎年毎年くりかえしていたのだろう。」

77 それは先にも言ったように砂のために川底が高くなって来ると、大水の時に大へん危険なことと、もう一つ大事なことは、水はけが出来なくなると言うことなのである。くわしく説明すると、家棟川と、祇王井川と一緒にになっている所では、川底が同じ高さでなければならないのが、坪持ちをしないでおくと、家棟川の川底は年々高くなっていき反対に祇王井川は高くないことになる。そうした時に、家棟川の水は下に流れないで、祇王井川の方へ逆に流れることとなる。これと同じことが大溝川の場合にも、言えるのである。今の東祇王井川は新川に流れているが、以前は大溝川と深沢で一緒になって流れていたから、坪持ちにより、大溝川の川底を低くしないことには、大溝川の水は、東祇王井川に逆に流れていくことになる。こうしたことから坪持ちをして川底を同じにすると同時に、水が祇王井川に、或は東祇王井川に逆に流れないようにするために、門扉



東祇王井川と大溝川（現在）



東祇王井川と大溝川（以前）

78 なる方の川に作ったのである。門扉と言うのは、家棟川の水が多い時は、祇王井川に入らないように、門をとじるのである。家棟川の水が少なくなって来た時に始めて門を開き祇王井川の水を下流に流すしかけになっている。同じように大溝川でも行われるのである。

川底が高く水がはけないことが、富波、北村、或いは隣村の高木、小南の込田を作る大きな原因となっているのである。

川浚（かわさらえ）
争議（明和七年）

川掘りについては、江戸時代にすでに大溝川をはさんで北村と小南が争いを起して裁判によって決定しているが、水を最も必要とする農村においては、水はなくてはならないものであるが、反対に、必要以上の不用の水があった時に、これを如何にして排出するかということも非常に大事なことである。青々と生長している稲が二・三日の長い雨の間に、一夜にして、白波の下に沈んだ時の人々のらくたんは言葉では、いえないであろう。

それのみか安全だと思っている堤防の決潰が、しばしばあり、常に人々は水のためになやまされていたのである。

私たちは、「もっと早く、今のようしておけばよかったのに。」と思うだろうが、川がきれる度に、水が一面につき、昔の人々も、いろんな工夫と努力をされて来ているのである。しかし今のような、大

じかけなことは、世の中の様子から、又お金の問題からして、よいと知りつつ、出来ずにいたのである。昭和六年に中里、兵主、北里、祇王の童子川に關係の深い部落が集まって「童子川沿岸耕地整理組合」を組織し、童子川の一部改修工事、新家棟川の完成、ダム工事、逆水工事等と言う事業をなしとげるために努力したのである。

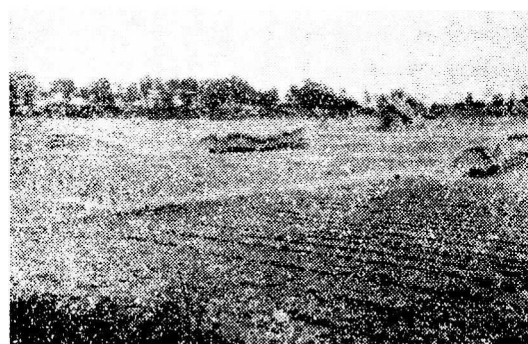
(三) 昔から沼地であった深沢

東関紀行にこの辺の様子が書かれている。

深沢のことを「ふかど」と普通は言っているが、本当の字名は「深沢」と言うのである。字名が示すように、深沢と言う名前の出たゆえんは、沢が大へん深かったと言うことになる。言いかえると、沢と言うのは沼のことであり、深いと言うのは奥が深いの意味で大へん広いことを表わしている。したがってこの地は沼地でヨシがおいしげり農業の出来ないふもうの地が大へん広く、北村の溜池の地が三町九反五畝十歩（約三八・六一ヘクタール）沼地が一町八反十二歩（約一七・八二ヘクタール）となっている。



(昔の沼地深沢)



(今の美田深沢)

「どうしてこんな広い土地が池であり、沼であったのだろう。」

これは先にも述べたが、大溝川も祇王井川も川底が同じ高さであるために、雨が降ると大溝川の水位が上り東祇王井川に流れこむ恐れがあり、そのために門扉で門をとじ大溝川の水位の下のを待つ、その間東祇王井川の水はそのまま動かずにとどまることとなり、大溝川の水位がさがってから門を開き流れ出るのであるから、水のとどまっている間が、一週間になることも十日になることもあったと言われる。しかも大溝川より朝鮮人街道までの間の流れは、全部深沢に流れて来ているのであるから、その受ける水量は大したものであった。

朝鮮人街道の所々に「ヒ」があり、それをぬけば深沢の地は沼地とはならなかったであろうが、この「ヒ」をぬけば北村にとっては一大事となるので、二町余を沼地とすることにより、北村の危きを救っていたのである。

灌漑用水としての北村の溜池

「北村の溜池は、場所から言えば上屋であるのに、どうしてここだけ

溜他の堤防改修

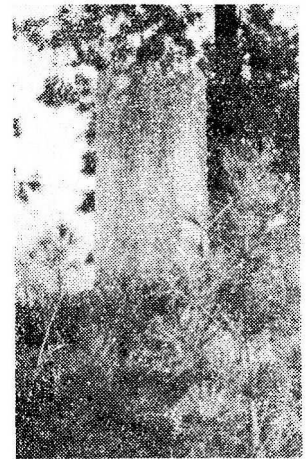
81

大貝の地名は大海から出ている。

北村のものとなっていたのだろう。」

日照りの続いた時に東祇王井川の水を利用して「ヒ」から灌漑されるわけであるが、水が不足して来た時にここにためられた水を利用するために作られたものである。だから、大正六年には特別に溜池周囲の堤防を高くして、どんな日照りにも利用出来る様に苦労がなされているのである。現在は逆水工事が出来、又新川に東祇王井川の水を排水することが出来るので溜地も田となり、深沢の沼地も美田と変って来たのである。

沼地であったと言う地名は、深沢だけでなく、隣村の小南、大貝等もそうである。朝鮮人街道を小南の方へ行くと、深沢の砂山の近くに石碑が立っているが、それに書かれているのを見ると、一度雨が降れば、排水が出来ず、広さ七〇町歩（約七〇ヘクタール）深さ四尺（約一・二米）の水がたまり農作物は言うまでもなく、道路をこわして交通をたち、その上伝染病は流行し朝鮮人街道をゆききする人は、しばしば舟で横断しなければならなかったと言われ損害がきつかった。こんな所から小南のことを「込み浪」とも言われ、この水害を防ぐように努力した先覚者をたたえるために碑が立てられているのである。



（先覚の労苦をたたえて）

（四） 干拓はこうして出来た

内湖干拓

82

琵琶湖周囲の内湖干拓

内湖の周りに川を掘り、内湖に流れ入る水を堀に入れて外湖（琵琶湖）に出し、内湖の水を、すっかり排水して、底までほしあげ、或いは土を入れて耕作地としているのである。これ等内湖は底に多くの肥料になる成分が貯えられており、自然によくこえた土があるから、肥料はやらなくてよく、耕作面積は広くなると言う一石二鳥の仕事であるために、盛に行われた。しかも日本が世界を相手に戦争した時であり、食料が非常に不足していたので人々はこの仕事を熱心に行った。深沢の干拓

童子川沿岸耕地整理組合により、県の計画で家棟川の上流にダムが作られ、しかも、昭和十六年の家棟川の決潰によって、家棟川の川道は方向を転じて現在の新家棟川となり、大溝川の水をこの大川に落したのである。一方東祇王井川の水は朝鮮人街道の下をくぐり新川に落すようにし、北村の沼地水は別の「ひかん」で東祇王井川及び街道の下をくぐって少しさがってから新川に落すようにされ、これがために新川は前の大きさよりずっと大きく、はば倍ぐらいになっている。

耕地整理法

山本喜一氏

新川の果す役割

83

大溝川の水は新家棟川に、祇王井川の水と沼地の水は新川に排水されたために、今まで「ヨシ」のおいしげった不もうの沼地は新しい土を入れることもなく、高低をならし、沼をたがやすことによって美田と変っていった。

北村所有の溜池は大正六年に堤防を大きくされてはいるが、この堤防の土を低

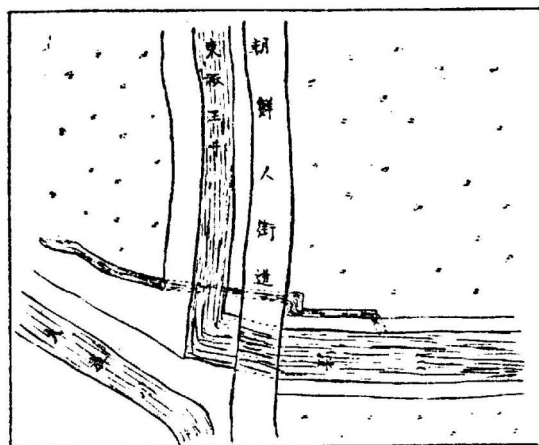
地にもって行き平地にならし田圃としたのである。しかもこれをされた時もまことによく、耕地整理法の適用をうけ昭和十八年村営をもって行われ、人々の協力をえて条里の整った田とされた。そして後、個人田、共有田に区分されたわけである。

北村から真すぐ朝鮮人街道を横切って、深沢に入っていくと、右手が個人田で、左は上屋の共有田となっている。

ここに特に記さなければならぬのは新川の拡張のために当時村長であった山本喜一氏が他村の反対があったにもかかわらず非常な努力をされたおかげで現在見るようなのが出来たと言うことである。新川は後でも詳しく述べるが、他の川とは違いこの村にとって二つの重要な役割を果たしている。それは、一つには深沢の受ける悪水を排していると言うことである。もう一つは逆水によって北村の大部分の地を日照りの時にうるおしていると言うことである。

84

今もなお長雨が続けば、水は増し一面水うみとなり、昔の深沢の面影を再現するが、しかし排水が非常に早い。収穫の面から見ると、一番土地が低く悪いと言われる、もと北村の沼地の所でも反当り二俵位は取れるとのことである。共有田ではまず四・五俵と言ったところ、個人田になれば他の地とかわらない程の収穫をあげていると言われる。このように年がたつにつれて美田にかわって行くことは祇王村発展の一つとして意義深いことではなからうか。



(溜池の排水と東祇王井川の排水はこんなになっている)